

# 万象点描



## 美術館造りから地域再興

農的社會デザイン研究所代表 蔦谷 栄一氏

里山の風景は日本の宝だ。里山は日本の各地に点在するが、秋田県にある羽後町田代地区もその一つである。

羽後町は県南に位置し、奥羽本線の湯沢駅からはバス利用となり、東京から東北新幹線を利用して約6時間。雄物川と出羽丘陵に囲まれた「緑と踊りと雪の町」である。県内でも屈指の豪雪地帯であるとともに、日本三大盆踊りの一つとされる西馬音内(にしもない)盆踊りで知られる。

その羽後町の中心部から車で西へ15分ほど。七曲峠を越えると里山が広がり、その風景はまさに息をのむほどに美しい。ここが田代地区で、かやぶきの民家がまだ多く残り、田んぼには稲を掛けるハサが美しく組み上げられている。

いとも多分に漏れず、過

### ■ 農村の原風景を守る

疎・高齢化が著しく、この50年で3500人いた人口は約1500人と半分以下に減った。4校あった小中学校も現在、小学校1校を残すだけ。「このままにしておくならば、近い将来、かやぶき民家も、圃場(ほじょう)のハサも、そこで生きる人々も消滅してしまう」と地域住民の危機感強い。

50年ほど前の話だが、この風景に魅せられた2人の男が田代地区を訪れた。一人は稲刈りをしている農民や野良で遊んでいる子どもたちの所に突然現れてパフォーマンスを繰り広げ、一人はそのパフォーマンスを追いかけてカメラのシャッターを切り続けた。

このパフォーマンスをしたのが、白塗り、裸の肉体であらゆる感情を表現する前衛芸術「暗黒舞踏」で知られることになる舞踏家の土方巽(ひじかた たつみ)。その土方をカメラで追い続けたのが写真家の細江英公(ほそえいこう)で、日本でも指折りの写真家として活躍するようになるが、田代地区で撮影した作品をまとめた写真集『鎌鼬(かまいたち)』は文部大臣賞を受賞している。

この「鎌鼬の里」を見たいと、国内にとどまらず米国、台湾、シンガポール、南アフリカなど海外から訪れる人が増えているという。こうした状況を踏まえ、細江英公の写真と土方巽のアーカイブズ(保管された記録)による美術館建設の話が持ち上がり、NPO法人鎌鼬の会を発足させた。鎌鼬の撮影現場にもなった旧長谷山邸を改修し、美術館として今年10月22日のオープンを目指して活動を展開している。

狙いは、芸術家たちを誘ってきた田代地区の原風景を守ること。国内外からたくさんのお客を町に呼び込み、この町に住んでみたいという人を増やす」ところにある。難題は、旧長谷山邸の内部改修と展示物収集にかかる資金の調達だが、秋田魁(さきがけ)新報社が運営するクラウドファンディング「FAN AKA I.T.A」を利用したの調達に挑戦している。

行政主導ではなく、あくまで地域住民主体に、この取り組みに関心を持つ内外の人たちの応援獲得によってクリアしようとしている。目標達成は容易ではないが、新たな手法も取り入れた地域活性化の試みに注目したい。併せて、<https://fan-akita.sakigake.jp> をぜひご覧いただきたい。